研究ノート

平田篤胤の医学哲学

市川　修

序

『江戸時代医学史』を書いた服部敏郎は篤胤の医学について、篤胤を医師として観察し、その医論・医術等について考究した研究がまことに数少ないと慨嘆して、篤胤の医学を中心とした論考を行った。[1] 篤胤の医学の概要はこれによって知ることができる。服部の論考を参照しつつ、この小論では篤胤の医学哲学を掘り起こしていきたい。

篤胤は佐竹藩士、大和田祚胤の四男として安永五年（一七七六）秋田で生まれた。文化二年（一八〇五）本居宣長の嫡子春庭に入門を願い出、同年許されている。これより篤胤は国学者として名をあげるが、文化四年（一八〇七）江戸で医業を開き、玄瑞と改めた。二、三年の短期間に転居を繰り返した。遅くとも文化六年（一八〇九）には医業は廃業という説もある。この期間、医者として診療を行い、また医学者としての著述や講演を行った。服部はいう。「篤胤の江戸在住中の医業は、わずかに二ヵ年ほどにすぎなかったが、その後、多くの門弟に対し『医道大意』を講じ、『医宗仲景考』を著し、『金匱玉函経解』の草稿をつくる等医学にも深い関心をよせていた。」そして篤胤の門下になった医師は十数名に上る。

小論は、服部のいう「篤胤独特の医論」、とりわけ医道について哲学するところを『志都能石屋』（別名、医道大意）と、『医宗仲景考』を主なテキストに使って論考する。

ところで、国学者篤胤の名は広く知れ渡るが、医師としてのその後はどうなったであろうか。篤胤の古学の普及は

幕府の忌むところとなり、天保十二年（一八四一）、一切の著述を差し止められ、秋田藩お預けの身になった。篤胤の、臨床医としての実力は秋田であらわれることとなった。すなわち、同年十二月、城中より召しだされ「藩主病気のため、御側医師より病状を聞き、治療法を上申せよとのことである。」

この医案は成功であった。篤胤の医案は採用され、その薬の効果があったのか、それとも祈祷の効があったのか、正午過ぎから、藩侯の病気もめきめき快くなってきた。このため医師としての篤胤の名声は藩内にとどろいたという。

一章

『志都能石屋（医道大意）』と『医宗仲景考』は篤胤の医学哲学を構成する二つの柱である。だが、題名からも察せられるように、取り上げられている内容には重複はほとんどない。それでは、互いはいかなる位置関係にあるのだろうか。篤胤は、文政九年七月記としるされている『医宗仲景考』で、『志都能石屋』についてこう述べている。「志都能石屋とは、予が殊に神醫道の淵源を論へる書の名なり」[2]としている。

『医宗仲景考』は、当時の漢方学界の大問題であり現在もその撰者について実像が不明とされている『傷寒論』の撰者について、それが誰かを、文献考証でもって決着させようとしたものである。篤胤は、その撰者は葛洪字稚川（抱朴子の著者。仙人）であること、そして従祖・葛玄字孝先が記した稿を編集したと論証し、同時に、漢方医学の医祖は神仙であるという命題を立てることによって、吉益東洞がいうところの、いわゆる神仙流医学（後述）の立場を唱道しようとしたものである。日本漢方の革新者の一人である古方の吉益東洞は、医に三つの流派があると説いた。すなわち、「疾医・陰陽医・仙家医（神仙流）の三つの流れがあり、疾医の道は、扁鵲・仲景の行ったもので、病毒の所在を見究めて、これに方をつけて毒を去って、もろもろの疾苦を治するものであり、陰陽医は、病の所在を視ずに、陰陽・五行の相生相剋、臓腑、経絡などの臆見で空理をもてあそび、実事からはなれているので、手にとって病気を治すことができない。（略）仙家医は道家や仙人の求めた不老長寿・久生長視の法を説くもので、葛洪・陶弘景・孫思邈などの説には、皆この神仙・養生の説がまじっており、（略）医学も亦この影響を受けて、ますます実事を捨てて空理を論じて」[3]と述べた。これに対して篤胤は、東洞が分類したいわゆる仙家医としての立場から、医祖は疑いもなく神仙である、この事実を見過ごして、医祖の精神を省みず、いたずらに末節の医薬論に終始するのは間違いである

と示すことで、東洞への正面からの反論をしたのである。篤胤は、今の世の医者達が虚名を追い求めるのは、医祖の精神に著しく反すると指摘した。そもそも、仲景の実名が知られないのは、医祖が神仙道の習いに従い、「その実名をつつみかくしてありける」ゆえに、その上、張機字仲景、戴覇、などの「寓名を用い」たために、「実名陰徳の顕はれず」に今日に至ったとした。

仙家医としての篤胤は『医宗仲景考』で、『志都能石屋』を含めた彼の医学哲学の結語を与えている。ここでは『医宗仲景考』において論じられているテーマを列挙して、以後の考察の土台とする。篤胤の医学哲学の主たる論点は、次の点において要約される。

1　養生論は主たるテーマの一つである。それは又、篤胤の論述の末尾におかれていることからも、彼の医学哲学のまとめであるといえる。それは次の箇所である。「されば医をなす者は、まづ神仙の道をうかがひて、未病を治むる方術を知り、しかして已病を治むる医薬に及ぶべきなり。未病は常なり、已病は変なり。常を治むる道を知らざる物、あに変を治むる道を知らむや。しかるをただに医薬のみを知りて、みだりに執匙に任じ、医師の名を群愚に盗み、財利をはかるに汲々として、司命の職と称し、君父にもはばかることなくその薬を薦む。あに仁術といふべけむや。」〔なお、漢字の一部を常用漢字に換えたことをお断りしておく。以下同じ〕(4)

右の論点については、二章で、養生論として再び取上げる。

2　『傷寒雑病論』の雑病篇は早く失われ、金匱玉函方の傷寒篇は宋の時代に削除された。それは大変残念なことで、篤胤自身も他の日本の漢方学者同様、原典を復元することこそ最重要である、との認識を述べている。(5)

更に、「よく古方に合ふ方論をひろひて採用するぞ医方学の要務なるべき」としている。

3　篤胤はこれより十五年前行われた、連続三、四回程度とみられる公開講演の速記録である『志都能石屋』においては、西洋医学に大いに期待を寄せ、ほぼ一回分の講義は『医範提綱』『解体新書』の内容を懇切丁寧に説明した。ところが『医宗仲景考』にはその片鱗もみられない。むしろ、手厳しい評価を、西洋医学ならびに当時の蘭方医に対して与えている。「後世みずから良医なりと誇らかなる徒がら殊更に岐衢につきて神の医道の淵源を忘れ、医術方薬をようよう難艱ならしめ、遂に西洋風の少智を振いて迂拘なる方薬を神とも神と信尊み、その方論に拘々たる藪医さへ世に多くふゑはびこらむとするなるは、忌まわしき事にこそ。」(6)この点については、改めて、二章、西洋医学との問合い、

と題した項で論考する。

4　この章で取り上げるテーマは、『医宗仲景考』、『志都能石屋』を通底する篤胤の「神医道」についてである。篤胤は、「志都能石屋とは、予が殊に神醫道の淵源を論へる書の名なり」と述べたがその「神医道」とはどのような内容であろうか。まず、はっきりしていることは、前項3で「神の医道」とあったように、篤胤が哲学する問題は、禁厭と医薬の双方を結合させているところの「医道」であって、疾医が専念するべき医術は二の次の問題であった。そして、医術に関しても「医薬方術各別にて、また互いに相ひ合わせて病を治する、是古への道なるが、方術は本にて医薬は末なり」と差別している。そうであれば、この「神の医道」の師は誰かが篤胤の論考の焦点になる。

結論をいえば、篤胤は、「顕界の良師の外に、幽界より祐る神師あることなる」[7]を示すことによって、実は万国に医薬方術を授けられた神が師であり、結局のところオオナモチノ命スクナヒコナノ命が師であることを明らかにしようとする。この点については、『志都能石屋』の段階では、篤胤の論述は直線的で独断的な主張に終始していた。宣長の道の学び、又、篤胤自身の『霊能真柱』で示す古伝をいわば公理として、その前提に立って古伝におけるオオナモチノ命スクナヒコナノ命の事跡を明らかにし、二柱の神々は今も、幽世を知らし給うのみならず、顕界の良医の医薬の効験を司られると指摘していた。

さて、『医宗仲景考』の段階では、『志都能石屋』の時と比べて直線的な講述ではなく、その主張は次のように詳しくなった。篤胤は、神仙流医学の立場をつきつめ、結局「唐土の医道も、その源は我が神の道より出たるが故に、方術医薬相ひ放なれず」[8]と、中国の漢方医学そのものがオオナモチノ命スクナヒコナノ命の御霊の恩頼であるという命題を立てるにいたった。そう主張する論拠は、以下の通りである。

まず、先にふれた「神医道」を定義することから始めよう。そもそも篤胤は「神医」という用語を、『志都能石屋』では「かの張仲景は（略）漢医の元祖、神医と云る程の名医」と、この一箇所で使っているが、『医宗仲景考』では「神医」なる用語は全く使っていない。唯、先にふれた「神医道」という箇所があるのみである。従って「神医」という概念は、仲景のことを篤胤が神仙道に通じた「真人」[9]である、と述べているところにおいて考えなければならないであろう。すなわち、神医とは、医薬に殊に功績のある「真人」のことである。しかしながら、神ではない。

左慈、葛玄、葛洪、は真人である。（ただ、孫思邈については、何故真人と称されるのか不詳である。）とりわけ、篤胤

は仲景を「神方中興の医宗」と称える。それのみならず、「仲景その世にさばかり神察の聞こえあらむに云々」と、「神醫道」の師と認める。要するに、神の下し給うた薬方（神方）は、中国の真人達によって此の世的には漢方として集成されたということである。

一方、「神師」は真人ではない。葛洪の従祖、葛玄こそは傷寒論の論述者であるが、その葛玄の師は左慈字元放といい、此の世にあって幽界の神仙と交わったとある。その中でもとりわけ、東華小童君という神との出会いがある。篤胤は東華小童君を「東華小童、また東華大神青君、泰一小子なども称ひて、万国に医薬方術を授けたる神なること」[10]としている。

従って、神師とは東華小童君であることは明らかである。ただ、東華小童君即ち、スクナヒコナノ命であるかどうかは、『医宗仲景考』では触れられていない。しかしながら、篤胤はそのことを確信していたことも、次の一文から明らかである。篤胤は言う。「そもそもかの二翁〔葛玄、葛洪〕よ。吾その古きを是とし、その遠きを貴びて崇重するに非ず。その伝ふる道の我が大神の道より出て精に入り、その功業また神の古道に因循せるが故に此れを取れり。」[11]

従って、「神医道」とは、幽界の「神師」と顕界の「神医」とが共同で立てた道である。

篤胤は、当時の漢方学界が、古方派、後世方派、考証学派の三派に分かれで論争している状況に鑑みて、『医宗仲景考』をもって、東洞のいわゆる「神仙流」の立場に立って、「一部の医門断定の書をも作りて後来の医をなす者に、医道の淵源を知らしめむと」望んだのである。

二章

すでに述べたように『志都能石屋』は『医宗仲景考』に先立つこと十五年前の書であるが、『志都能石屋』と『医宗仲景考』に共通して、両者同じ趣旨で説いているのは、養生についてと神医道についてである。十五年の歳月を隔てても、以上の論点については内容は変わりがない。これに比べて、西洋医学に対する、いわゆる間合いのとりかたは、両者は正反対である。

この第二章では、主に西洋医学論について論考するが、まず、『医宗仲景考』と『志都能石屋』に共通するテーマ「養生」について先に若干考察し、次に篤胤はいかなる理由で初めは西洋医学を受容し、後にこれと距離をおくにいたったのかを考察する。

○養生論

『志都能石屋』における養生論は、神医道に関する講述

に比べて、力の入れ方の比重は重くはない。しかしながら、この講演の末尾に位置づけられており、事実末尾を飾るものである。いわば篤胤の『志都能石屋』の医学哲学に関していえば、全体のまとめというべきものである。さらに言えば、『医宗仲景考』の末尾をも飾るというべきである。それは、篤胤が『医宗仲景考』の末尾で次のように述べたことから明らかである。篤胤はいう。

「医をなす者は、まづ神仙の道をうかがひて、未病を治むる方術を知り、しかして已病を治むる医薬に及ぶべきなり。未病は常なり、已病は変なり。常を治むる道を知らざる者、あに変を治むる道を知るや。[12]」

この「未病」を説く事すなわち、養生を説く事である。貝原益軒の「養生訓」は正徳三年（一七一三）上梓された。その一節に次のように説いている。「聖人は未病を治すとは、病いまだおこらざる時、かねてつつしめば病なく[13]（以下略）」

加えて篤胤の養生論が、同時に病因論につながることを明らかにしておこう。篤胤が説く病因としては、心因と憑依の二つの因がある。心因については、『志都能石屋』（五〇一頁、五〇三頁）に気の衝逆、もしくは沈滞、の二つに区別した解説がある。養生論は「欲にかつ」を説くゆえに、逆にいえば、欲に勝たねば病に陥るという、病の心因論と直結する。篤胤は『養生要訣』から、病因は六害であり「それ（六害）が悉く心労の本となるに依て、病がおこる」としている。因みに、『養生要訣』の著者は葛洪である。篤胤と益軒は養生の第一番目に欲を減らし、心の安静を説くのである。

一方、憑依霊による発病については『霊能真柱』等で論じられている。

○西洋医学との間合い

近世の漢方医学と西洋医学との間の距離をつかむためには、篤胤が漢方学界の中でどの流派に属したのか検討することが必要である。一般的にいえば、古方医から蘭方医に移ったケースは比較的多いとされる。[14]

吉益東洞の分類法では仙家医に分類される篤胤であるが、一般的な漢方医学史では、どの流派に属するかを検討する。この場合、座標軸には吉益東洞の古方をおくのが便利である。東洞の医学哲学は、他の流派に比べて明確な主義主張を貫いていた。

東洞の日本漢方界に与えた影響は大きかった。とりわけ実事にもとづいて親験に徴し、扁鵲や仲景のような名医の処方でも、効のないものは取らない、後世の俗間の処方でも、実事に益があれば取り用いるべきである、との主張の

影響は大きかった。

東洞の流れを汲む一人に和田東郭がいる。服部敏郎によれば、篤胤は臨床医術において東郭に負うところがあるという『江戸時代医学史の研究』（二五七頁）。また、篤胤は臨床家としての北山友松子を『志都能石屋』で高く評価している。北山は後世方医である。

しかしながら、漢方理論に関しては、東郭よりは、江戸医学館の考証学派の山田正珍を多く引用しているのである。引用に当たっては、正珍、又は、正珍ぬし、又は圖南先生、と記している。例えば、『医宗仲景考』（五三六頁）で、傷寒論自序の偽託や否やの件では、篤胤はこれを偽とする中西惟忠に対して、これを否定する山田正珍を強く支持している。文久元年（一八六一）刊行された『金匱玉函経解』に至っては、吉益東洞の長男で、万病は一毒によって起こるが、この毒の乗ずるところは気血水であるという学説をたてた吉益南涯の名前もあるが、圧倒的に山田正珍の『傷寒論集成』における学説に対する批判検討がなされている。

こうしてみると、篤胤は一応どの流派とも係わっていることがわかる。篤胤が結局いずれの流派に位置づけられるのかは更に検討する余地が残されている。

ただ、以上、考察したところを見る限り、篤胤がこれまでの漢方理論を画期するような新しい漢方原理を唱えたとはいえないように思われる。例えば、篤胤は、蘭方の病因論を摂取した漢方理論を構想してはいない。さりとて医学哲学の範囲では、易学にも踏み込んではいない。

篤胤が古易に関する徹底的な研究を行っていることに比べれば、彼の医学哲学においては易学は未だ係わっていないのである。篤胤が陰陽五行を受け入れていたことは明らかで、それは鍼灸医学の原典である『素問』を引用していることからも分かる。『素問』は、鍼灸をはじめ、五行論・五臓論なども含んでいる。そうではあるが、篤胤は、易学的漢方理論を構想していない。

さて、古方の漢方臨床は方証相対説に依る。この場合、必ずしも病名の究明は必要とされない。正しく証をみて、正しい処方であれば療治できる。一方、とりわけ救急の場合、証は刻一刻千変万化する。吉田寅二は言う。「漢方に関して生きたコンピュータのような剣持久氏の判断力をもってしても、重病者の刻々に変化する証を正確にとらえることは容易ではなかったことと思う。それは証というものは今これだと思っても、すぐ変化してしまうことがあるからである。」[15]

ここに、西洋医学の解剖学的根拠に基づいて、病因というものを把握しなければならない必然性がある。医師として、篤胤はこの必要性を実感していた。「志を定めるとは、

病の根拠を探り出すことだ」と言う。ここで、今一度、篤胤が西洋医学に期待したものは何であったかを考察しよう。篤胤の西洋医学受容とは、病因を正しく把握するための実用主義的な受容にほかならない。篤胤は言う。

「外つ国より奉る種々の中に、医薬にあづかる類のことは、追々申す通りの訣ゆえ、別して御国の用をなすでござる。それは尤も善いことを撰んで取るが宜しいが、そのうちに西洋人の解体の事をよく明らめておいたを見て、常に体の中はかうした物と云ふことを心得るが肝要で、病の発するその原を知らねば療治はなりがたいでござる。」[16]

とはいえ、「医業をする心得には大きになる」が、日本人は人体の解体などしないほうがよい。外国の詳しい書物をみて、それでわからなければ獣を解剖するくらいで十分という。「人の体を細密に断割て見るなどは、こりゃ紅夷の国のえみし等が致すことで、まことにえびす臭く、御国の人などなすべきことでない。」と、自らは四度は実見した結果、そういう結論を出している。

いずれにせよ、『志都能石屋』は、西洋医学の外科、解剖生理、内科、のいずれも有用であると認め、連続三、四回とみられる公開講演の、相当の時間を割いて西洋医学で明らかにされた解剖生理の解説をしている。講演の中で篤胤は、参考図書としては、『解体新書』、『医範提綱』、『西説内科提要』、の三点を挙げているが、講義で引用しているもののほとんどは『医範提綱』、『解体新書』からの内容に限られている。だが、篤胤にとって内科の内容こそ病因を知る上で参考となったのではないかと思われる。残念ながら、『西説内科提要』の内容を講演録の中に跡づけることは今回できなかった。

それでは、何故、篤胤は十五年後、『医宗仲景考』では西洋医学への評価を大きく下げているのであろうか。それは次の箇所から、西洋医学に目も心も奪われつつあった医者仲間への篤胤の嫌悪感、失望感を読み取ることができる。篤胤は言う。「神の医道の淵源を忘れ、医術方薬をようように難艱ならしめ、遂に西洋風の小智を振いて迂拘なる方薬を神とも神と信尊み、その方論に拘々たる藪医さへ世に多くふえはびこらむとするは、忌まわしきこと」[17]

そのことは平野重誠の『一夕醫話』に当時のオランダ内科がはなはだ不備であったとの記録があることからも裏づけられる。[18] しかしながら、問題はもっと深いところにある。篤胤の西洋医学への根本的な危惧感が元からあったのが、ここにきてはっきりと自覚されてきたからでもあろう。すでに『志都能石屋』の段階で次のような、今日にも通じる懸念を表明しているのである。「彼紅夷ら、世には真の神あることを知らず、人の智は限り有るを、限なき万物の理

りを考へ究めんと欲るについては強たる説多く、元よりサカシラなる国風なる故に、現在の小理に拘泥て、かえって幽神の大儀を悟らず。それ故にその説至って窮屈にして我が古道の妨げになる事も多いでござる。さりながら、世間の有様を考ふるに、今は物事新奇を好む風俗なれば、この学風も儒仏の道の栄えたる如く、段々と弘まり行くことであろうと思はれる。しからんには、世のため人のためとなるべきことも多かろうなれども、又害となることも少なかるまいと思はれるでござる。」(19)

結語

篤胤の医学哲学の広範囲な取り組みの中で、何がその核にあたるであろうか。論者は篤胤は医学の限界を素直に見つめた人だと思う。そういう視点から考えるなら、真に病を癒すには神明の加護が不可欠という強い自覚が篤胤にまずあったのではなかろうか。篤胤は『霊能真柱』下巻において、病因の一つを邪神邪霊達の仕業と見定めていた。篤胤自身の臨床経験を古学の視点で反省した結果、黄泉の国から来たと思われるケガレを持った憑依霊が、病の底の隠れた原因としてあると認識したのである。それ故にこそであろうが、エビスとしての医薬の神があくまで日本古来の神にお坐しまし、一度は海外に往かれたオオナモチノ命スクナヒコナノ命が斉衡三年に茨城沖から帰国なされたことを、『志都能石屋』で強調している。篤胤自身、死命を制する医術にたずさわるものとして、医薬の神のご加護を、今、願えることに大きな安堵を覚えていたのではなかろうか。篤胤の医学哲学の根底には、この安堵と喜びがあり、そこから「神医道」についての論考が進んだように思われる。これを直接論証することはおそらく困難ではあろうけれども。

注

(1) 服部敏郎　江戸時代医学史の研究　吉川弘文館　昭和五三年　二六一頁

(2) 新修平田篤胤全集第十四巻『医宗仲景考』名著出版　一九七七年　五二五頁　以下、『志都能石屋』及び『医宗仲景考』の引用は同書による。

(3) 大塚敬節『近世前期の医学』日本思想大系六三巻　岩波書店　一九七一年　五三四頁

(4) 『医宗仲景考』五四八頁

(5) 同書　五四二頁

(6) 同書　五四七頁

(7) 同書　五三六頁

(8) 同書　五四八頁

(9) 同書　五二二頁　「別に大陰徳ある真人の」

(10) 同書　五三五頁

(11) 同書　五七四頁

(12) 同書　五四八頁
(13) 貝原益軒『養生訓』講談社学術文庫　二〇〇七年　二七七頁
(14) 大塚敬節『漢方医学』創元社　二〇〇七年　六九頁
(15) 吉田寅二『救急漢方の考え方』東明社　一九八三年　五三頁
(16) 『志都能石屋』四八〇頁
(17) 同書　五四七頁
(18) 富士川游『日本医学史』裳華房　明治三七年　七四五頁
(19) 『志都能石屋』四四五頁

（市原看護専門学校講師）